Aria -大分音楽幻想-

大分県出身芸術家の系譜

今回は私の身の回りの音楽にまつわる話題をお話ししよう。私が高校の頃は、美術、書道、音楽の中から一科目を選んで履修しなければならなかった。当時の悪ガキ達は道具が必要な美術と書道を嫌って、皆音楽を専攻していた。そうした真剣に芸術を学ぶとはとても言えない状態の中で際立った思い出がある。それが音楽を教えておられた藤沼恵(けい)先生だ。退職後も苗字の「藤」という名を取った『ウィステリア・コール』を指導され、亡くなられた今も教え子達に引き継がれて大分県でも代表的な合唱団の一つとして、活躍している。

筆者が高校時代一時期合唱部に入っていたときの上級生もこの合唱団で今も健在である。筆者が2年の時、その音楽履修生全員による合唱を校内の音楽会でやると宣言された先生は、何とワーグナー作曲のタンホイザーから『歌の殿堂を讃えよう』の合唱を取り上げたのだ。先生は小柄な上にころころと太っておられたので、運動部の猛者もいる履修生の中に入ると姿が見えなくなるから、稽古では椅子の上に仁王立ちで汗まみれになって叱咤激励された。これは先生ならではの彼らへの挑戦だったのではないかと思える。兎に角テノールの最高音はどんなにしても出ない状態だったにもかかわらず、先生の真剣さが乗り移った生徒たちが本気になった本番は大成功だった。後にオペラ団体の東京二期会で働くことになって、実際に『タンホイザー』を舞台にかけたとき、この合唱が始まった瞬間に鳥肌が立ち、こみ上げてくるものがあったことを思い出す。

先生は旧大分県立第一高等女学校の教師時代に、大分が空襲を受けて虎の子のシュタインウエイ製ピアノが焼けてしまいそうになったとき、教え子達が火の粉の中でこのピアノを無事に運び出したという逸話がある。その焼け残ったピアノは、旧制中学と高等女学校の合併によって誕生した県立上野丘高校に運ばれ、そこで学んだ我々の学生時代にも立派に役立っていた。

今にして思えば、先生は、誰にとっても合唱が音楽を理解する上で一番大切な手段だと考えられていたと思われ、高校時代も合唱団が県下で常勝を誇ったし、ウィステリアコールは、聴くところによれば、前記の女学校時代の教え子達12名が、ずっと先生と歌っていたいと立ち上げたという。厳しいながらも愛情溢れる指導は、このように教え子達に引き継がれていくものだ。

さて、藤沼先生が定年を迎え非常勤講師になられたときに、新しく着任されたのが辛島醇一先生だった。筆者の同級生に先生の妹さんがおり、同じ合唱部に入っていたが、卒業後東京芸大の声楽科に進んだ。更に、彼女の兄上輝治氏はピアニストとして東京芸大卒業後ベルリン芸術大学で研鑽を積まれ、芸大の教授を長年務められた。チェリストの光義氏、ジャズピアニストとして世界で活躍されている文雄氏も兄弟の一員であり、また次の世代では本学キャンパスにある県立芸術緑丘高校でチェロを教える慎一氏は、醇一先生のご長男であり、輝治先生のお嬢さんは二期会研修所で学んだ声楽家だ。実はこのファミリーの父上に当たる武雄氏が大分大学で音楽を教えられた教授であり、まさに音楽一家のファミリーツリーなのだ。このような例はバッハ親子兄弟の他に滅多に聞かないが、筆者はその殆どの方とお知り合いになれたのは、まさに大分に帰ってきた余得の一つでもあり、ご縁としか言いようがない。

この上野丘高校では、県下でも有数の進学校であるにもかかわらず、その後も音楽とは縁がある。最近の卒業生まで数えても、日本のオペラ界で活躍する歌手は片手ではすまない人数だ。以前紹介した野々下由香里、波多野睦美と同じ頃、同じ宮本先生に薫陶を受けたテノールの中村弘人も、後に東京芸大で学び、大分の芸術緑ヶ丘高校で後輩の教育に余念がない。その息子さんが昨年瀧廉太郎記念全国高校声楽コンクールで2位を勝ち取り、副賞としてウィーンへの短期留学を果たした。同じ声楽を学んでいた両親が初めて出会ったのが留学先のウィーンだったというオチまでついている。けだし、大分における音楽家の系譜はこのようなつながりがあって脈々と繋がっていると言えるかもしれない。

中山欽吾 なかやまきんご
i-chiko総合文化センター館長
(公財)大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
(公財)東京二期会理事長